

# 日本語の多義語「ヒト」の認知意味論的分析

皆 島 博\*

(2015年9月28日 受付)

キーワード：多義語，多義性，意味拡張，認知意味論，放射状カテゴリー

## 1. はじめに

本論は、日本語の名詞「ヒト（人）」を取り上げ、その多義構造と意味拡張の動機付けについて、認知意味論の観点から分析を行う。「ヒト」という名詞は、「社会のメンバーとしての人間を指し、くだけた会話からさほど硬くない文章まで幅広く使われる日常生活の最も基本的な和語」（中村 2010：884）であり、次のような複数の意味（語義）で用いられる点で多義的といえる。

- (1) a. 〈人類〉：原猿，サル，類人猿，ヒトを含むグループを霊長類と呼びます。
- b. 〈他人〉：ヒトの目を気にして生きるのはとても生きづらいですね。
- c. 〈人材〉：政界にヒト無く財界にヒトなしと言われる今日この頃です。
- d. 〈性格〉：長年の友人は結婚でヒトが変わってしまいました。

認知意味論では、上のような「ヒト」が提示するさまざまな意味は無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（基本義）を出発点として、なんらかの認知的動機付け（メタファー，メトニミー，シネクドキ）によって意味拡張を展開し、相互に関連性のある意味のネットワーク，すなわち，放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。したがって、本論の目的は、「ヒト」に関して、次の3点について、認知意味論の立場から記述を行い、それらを明らかにすることである：

- ①「ヒト」の複数の意味（語義）の区別
- ②「ヒト」のプロトタイプの意味（基本義）の仮定

---

\*福井大学教育地域科学部人間文化講座

## ③「ヒト」の意味拡張の動機付け（メタファー、メトニミー、シネクドキ）の認定

## 2. 放射状カテゴリーとしての多義語

認知意味論では、人間を、意味を読み取り、意味を発信する主体とみなし、「意味」については、人間の身体性（感覚・知覚・認知など）の総合的な営みを通じて概念化されたものとする。そして、概念化することはカテゴリー化（範疇化）することと同じであるという立場を取る。

カテゴリー化とは、現実世界に存在するさまざまなモノをグループ分け（分類）して、ひとまとめにして捉える心の働き（認知）をいう。認知意味論以前（アリストテレスの時代）の古典的カテゴリー観では、カテゴリーのすべてのメンバーがメンバーであるための必要十分条件を満たす集合と定義され、他のカテゴリーとの境界線も明確なものと考えられていた。これに対して、認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーのメンバーの必要十分要件は、[+（プラス）]か[-（マイナス）]かの二項対立に基づいて決定されるのではなく、メンバーの間に中心的メンバーと周辺のメンバーの区別が存在するだけで、カテゴリーとカテゴリーの間には明確な境界線は存在しないと考える。認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーには次のような特徴があることが提案されている（Wittgenstein 1978；Labov 1973；Rosch 1975；Lakoff 1987）：

- ①カテゴリーのメンバーは家族的類似を示す
- ②カテゴリーのメンバーには典型的事例が存在する
- ③カテゴリーのメンバーはプロトタイプ効果を示す

まず、「家族的類似」とは、カテゴリーの全メンバーは共通の性質を持っているわけではないが、各メンバーが部分的にどこかで共通の性質を持つことによって、カテゴリー全体の統一性が保たれていることをいう。次に、「典型的事例」とは、カテゴリーのメンバーの中には、最もわかりやすい例、つまり、代表的なメンバーであるプロトタイプが存在することをいう。最後に、「プロトタイプ効果」とは、カテゴリーのメンバーは均質なものではなく、典型的なものとはそうでないものに分かれ、メンバー間でカテゴリーへの帰属度に程度差が存在していることをいう。

ある語が相互に関連した複数の意味を持っていることを多義性といい、また、そういう語を多義語というが、認知意味論では、多義語を一種のカテゴリー（複数の語義の集合）と考える。したがって、多義語のカテゴリーは、そのメンバーとしての多義語の個々の意味から構成される。例えば、『新選国語辞典』の「ヒト」の項目には次のような意味が挙げられている：

- ① 人類。人間。
- ② 権利・義務の主体である自然人。
- ③ 他人。世間の人。
- ④ おとな。成人。
- ⑤ しかるべき人。優れた人。
- ⑥ 人物、性質、人柄。

つまり、「ヒト」という多義語のカテゴリーでは、上記①～⑥の各語義がカテゴリーのメンバーということになり、カテゴリーを構成するということは、カテゴリーの3つの特徴を示すということになる。したがって、カテゴリーのメンバー（各語義）の間には、典型的な意味（プロトタイプ）とそうでない意味（非・典型的な意味）との違いが存在し（プロトタイプ効果）、全く同一の意味はないが、部分的に類似した意味が混在することによって、カテゴリー全体としての統一を保っている（家族的類似）と考えられる。

このように、一つの語が多義性を獲得することを、認知意味論では意味拡張というが、それはカテゴリー拡張の結果生じたものとする（Lakoff 1987；Sweetser 1990；Taylor 1995）。認知意味論では、多義語というカテゴリーは、古典的カテゴリー観の要件を満たすものではないので、そこには中心メンバー（プロトタイプの意味）とそれ以外の周辺のメンバーとが混在することになる。なお、プロトタイプの意味（基本義）とは、複数の意味の中で最も基本的な意味のことであるが、次のような特徴をもつ（Dirven and Verspoor 1998；舩山 2002；瀬戸 2007a；高橋 2010）：

- ① 文脈なしで最も想起されやすく、身体性・具体性が高い。
- ② 言語習得の早い段階で獲得される。
- ③ 他の意味への意味拡張の起点となる（転義との関連性を自然に説明できる）。
- ④ 使用頻度が高いことが多い。
- ⑤ 通時的に最初に確立されたものである場合がある。
- ⑥ 慣用表現や比喩で多用される。

カテゴリー拡張では、この基本義を起点としてメタファー、メトニミー、シネクドキといった認知的動機付けに応じて、複数の方向へ語義の意味拡張が展開していく。このようなカテゴリー拡張の最も一般的な形態が放射状カテゴリーと呼ばれるものであるが、放射状カテゴリーは、Lakoff (1987) で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心（プロトタイプ）的メンバーを取り囲むように2次的に周辺（非プロトタイプ）的メンバーが位置づけられ、その2次的なメンバーを中心にして、さらに3次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう（辻 2002: 238）。

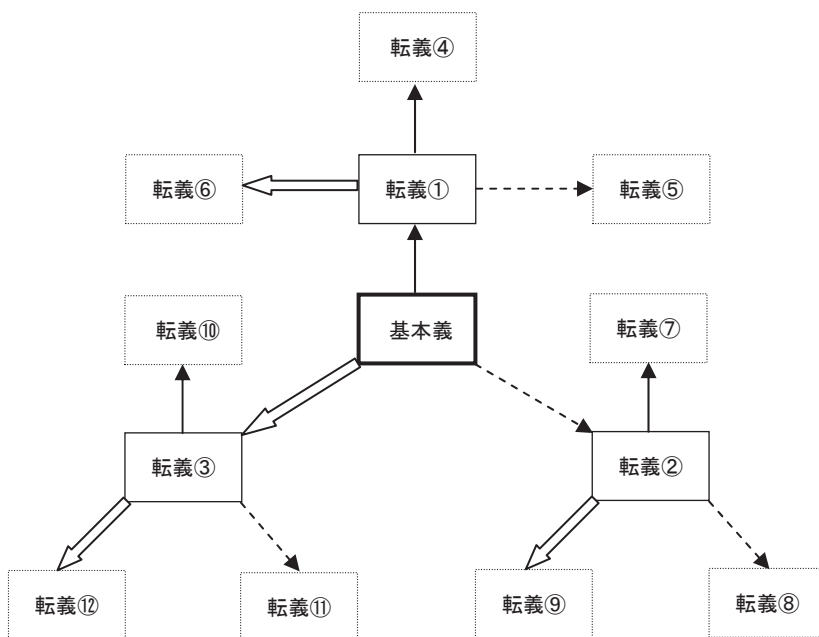
認知意味論において、このようなカテゴリー拡張を引き起こす要因（動機付け）として主要な

役割を演じるのが「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喩（言葉のあや）である。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、瀬戸（2007a, b）、舛山・深田（2003）にしたいが、次のように定義する。

- ①メタファー（隠喩）：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ②メトニミー（換喩）：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ③シネクドキ（提喩）：一般的な意味（類概念）を持つ形式を用いて特殊な意味（種概念）を表す、逆に、特殊な意味（種概念）を持つ形式を用いて一般的な意味（類概念）を表す。

最後に、放射状カテゴリー（意味のネットワーク）のモデルを示すと次のようになる（辻 2002: 238；瀬戸 2007a: 5；瀬戸 2007b: 41 を参考に作成）。なお、図で実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す。

図1 放射状カテゴリーのモデル



上のモデルで、中心に位置する「基本義」が第1次メンバー（プロトタイプ）で、そこから、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、〈転義①〉〈転義②〉〈転義③〉の第2

次メンバーへとカテゴリー拡張をしている。さらに、〈転義①〉から、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、〈転義④〉〈転義⑤〉〈転義⑥〉の第3次メンバーへとカテゴリー拡張をしている。〈転義②〉と〈転義③〉からのカテゴリー拡張についても同様である。ただし、これは多義構造の放射状カテゴリーのモデルなので、すべての多義語がこのような意味拡張のプロセスをたどるということではない。

### 3. 「ヒト」の複数の意味

ここでは、「ヒト」の複数の意味（語義）の区別を行うが、その際、指針となるのは国語辞典における意味の分類と記述である。以下、3種類の国語辞典の意味の記述を比較する。

#### 『広辞苑』

- ①サル目（霊長類）ヒト科の動物。現存種はホモ・サピエンスただ1種。人類。また、その一員としての個々人。人類。
- ②〔法〕権利義務の主体たる人格。自然人と法人とに分けられる。出生から死亡に至るまでの自然人。
- ③世の中の人。世人。
- ④他人。
- ⑤（代名詞的に）お前。あなた。
- ⑥おとな。成人。
- ⑦然るべき人。立派な人。人材。
- ⑧臣下。家来。従者。
- ⑨特別の関係にある人。夫または妻。
- ⑩心だて。人がら。ひととなり。性質。
- ⑪人のけはい。ひとけ。

#### 『大辞林』

- ①霊長目ヒト科の哺乳類。直立して二足歩行し、動物中最も脳が発達する。言語をもち、手を巧みに使うことによってすぐれた文化を生み出した。現生種は一種で、学名はホモ・サピエンス。人間。人類。
- ②ある特定の一人の人間。個人。
- ③一定の条件に合った個人を漠然とさしている。
- ④能力などのすぐれた特定の個人。立派な人物。人材。
- ⑤性質から見た人間。人柄。人格。
- ⑥自分以外の者。他人。
- ⑦当事者以外の世間一般の人々。世人。
- ⑧自分と相手以外の第三者。
- ⑨話し手が自分を第三者のように見立てていう。
- ⑩動作・状態・資格などを表す語のあとに付いて、それらの主体であることを表す。者。方（かた）。
- ⑪特定の関係にある人間。夫・妻・恋人など。
- ⑫〔法〕権利義務の主体たる法律上の地位。自然人と法人があり、狭義では、自然人のみを指す。法的人格。

## 『大辞泉』

- ①動物分類学上は、霊長目ヒト科の哺乳類。直立二足歩行し、手で道具を使い、脳はきわめて発達し、複雑な言語をもつ。多様な文化を伝承し、地球上で最も栄えた文明をつくり上げている。現生種は一種だけ。学名はホモ・サピエンス。人間。人類。
- ②個々の人間。ある特定の個人。
- ③㊦その事をするのにふさわしい人材。有能な人材。
- ④ある仕事・職業などに従事する人材。
- ⑤成人に達した者。おとな。
- ⑥人柄。性質。
- ⑦世間の人間。
- ⑧自分と相手以外の人間。他人。
- ⑨話し手が自分を第三者のようにいう語。わたし。
- ⑩㊦妻が他者に対して、夫をいう語。④意中の相手。恋人。
- ⑪法律上、権利・義務の帰属主体である地位または資格。権能力者。自然人と法人とがあり、狭義には自然人だけをさす。

以上、3つの国語辞典における「人」の意味の分類と記述を再整理してみると、次のように8通りに区別できる<sup>1)</sup>。

- (2) a. 人間。世人。個人。個々の人間。世間の人間。世の中の人。当事者以外の世間一般の人々。
- b. 人類。ホモ・サピエンス（学名；唯一の現存種）。人類の一員としての個々人。霊長目サル目ヒト科の哺乳類（動物）。直立二足歩行し、手で道具を使い、動物中、最も脳が発達し、複雑な言語をもつ。手を巧みに使うことによって、すぐれた多様な文化を生み出し、それを伝承し、地球上で最も栄えた文明をつくり上げている。
- c. 人材。立派な人物。有能な人材。然るべき人。能力などのすぐれた特定の個人。その事をするのにふさわしい人材。ある仕事・職業などに従事する人材。
- d. 人柄。人格。性質。心だて。ひととなり。性質から見た人間。
- e. 他人。自分以外の者。自分と相手以外の人間。自分と相手以外の第三者。
- f. わたし。話し手が自分を第三者のように見立てていう。話し手が自分を第三者のようにいう語<sup>2)</sup>。
- g. ある特定の個人。ある特定の一人の人間。一定の条件に合った個人を漠然とさしていう。
- h. 夫・妻・恋人など。意中の相手。特別の関係にある人。特定の関係にある人間。

上記のように、国語辞典の記述を再整理した結果をもとに、「ヒト」に対して最終的に次のような7つの意味（基本義と転義）を認定する。

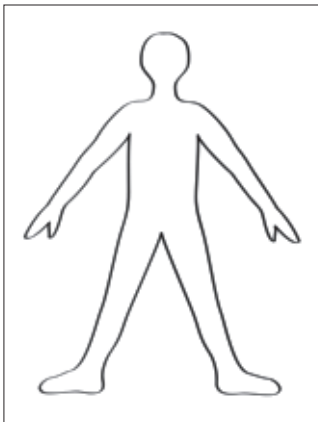
①基本義（人間）：概念 [頭部・胴体・両手・両足があり，2本足で立って歩き，言葉を話す，外界に存在する生き物]<sup>3)</sup>

- (3) いよいよ歩道も完全になくなった。荒れた細い路肩を，クルマに気をつけながら歩くしかない。こんな状態でも自転車と同じように乗って走る強気なユニサイクリストもいるかもしれない。だがやはり俺はやめておく。怖い。こんな道を延々と歩いてるのは俺ぐらいだろうと思っていたら，はるか前方からヒトが歩いてくるのが見えた。なにやら大声を出しながら歩いてくる。しかも，坊さんだ。

(<http://www.geocities.jp/kikenjien/unijapan603.html>)

「ヒト」の基本義としては，上の例文で使用されている「ヒト」の意味を仮定するのが妥当であろう。「ヒト」という語として日本語に含まれるということは，カテゴリー化されていることを意味する。そして，カテゴリー化されているということは，スキーマ<sup>4)</sup>が形成されていることを意味する。「ヒト」については，概略，下のようなスキーマを仮定できるであろう。

図2 「ヒト」のスキーマ



スキーマは，抽象化された知識構造なので，内部構造をもつ。スキーマの内部構造の中で，特定の事例について，初めて値が決まる変数的項目をスロットという。スロットとは，一種の意義特徴であるが，「ヒト」の場合，[動物的側面][社会的側面][能力的側面]などのスロットが想定されるが，例えば，[能力的側面]のスロットには[言語の使用][二本足歩行][高度な知能]などの値を入れることができる。これらのスロットの中には，百科事典的な意味を含むものもあり，本論では，これらのスロットが意味拡張において重要な役割（動機付け）を果たしていると考えられる。

**②転義〈人類〉：概念 {直立二足歩行をする，霊長目サル目ヒト科の哺乳動物（ホモサピエンス）}**

- (4) ヒトは進化の途上で，直立二足歩行を始め，火や道具の使い方を覚え，そして言語を獲得しました。これらはヒトをしてヒトたらしめている特徴ですが，ここでいう「言語」は音声言語にほかなりません。文字の使用が文明の発達や 社会の営みにとって大きな役割を果たしていることは言うまでもありませんが，これは音声言語から見れば二次的なものにすぎません。

(<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/ro0008.html>)

**③転義〈人材〉：概念 {才能のある，役に立つ，有能な人間}**

- (5) 「ヒトの三井」。いつしか三井グループはそう呼ばれるようになった。解釈はさまざまだが，その大きさが「人材」の豊富さで評された企業グループであるという点について異論がある人はいないだろう。それでは「人材」を育てた社風の原点はどこにあるのだろうか？享保7年（1722），今から約290年前，三井家の家祖・三井高利の嫡男・高平（隠居名・宗竺）が制定した三井家とその事業を規定する家法「宗竺遺書」に「人」を大切にする精神が記されている。

(<http://www.mitsuiipr.com/special/100ka/20/index.html>)

**④転義〈性格〉：概念 {人間の感情・意志，あるいは行動・言動に見られる傾向}**

- (6) さて，当日。Kと会ったのですが，「絶対間違えたりしないでね。完璧にやってよね。私の披露宴，台無しにしないでよね」と言われました。Kはヒトが変わったみたいにイライラしていました。披露宴での私たちの余興は，何度も練習した甲斐があって，大成功だったのですが，余興の前は，Kから言われた言葉が怖すぎて，料理も口に全然入りませんでした…。

([http://www.medetai.com/community/modules/d3forum/index.php?topic\\_id=1727](http://www.medetai.com/community/modules/d3forum/index.php?topic_id=1727))

**⑤転義〈他人〉：概念 {自分以外の個々の人間}**

- (7) 自己嫌悪や罪悪感が強い人は，まるで自分が他のヒトにとって迷惑な存在だと感じる場合があります。ヒトに迷惑をかけていると感じると，私たちは嫌な気分になります。このような気分は基本的に，私たちはあまり感じたくないものです。

(<http://www.counselingservice.jp/lecture/lec147.html>)



#### ⑥転義〈特定の個人〉：概念 {自分と何らかの関係がある人間}

- (8) 10時から新大阪でヒトと会う予定だったのですが、着いてからチャットワークを確認したら明日に変更になってる(笑)。家を出る前に確認するべきだった…。ということで、今更ながらスタバでMacBook Air広げてます。せっかくだし何か仕事して帰りたいなあ。  
(<https://www.facebook.com/hirokikato/posts/747324691973590>)

#### ⑦転義〈意中の人〉：概念 {自分と恋愛関係あるいは婚姻関係などがある人間}<sup>5)</sup>

- (9) 大切なヒトと過ごしたい冬のイベント「クリスマス」。恋人を連れてどこへいこう？と悩んでいる方も多いのではないのでしょうか。そんな方のために…今回は、gooランキングが「gooリサーチ」のモニターに対して行ったアンケートの結果をもとに発表した「大切なヒトと一番行きたいクリスマススポットランキング」をご紹介します！  
(<https://retrip.jp/articles/2306/>)

### 4. 「ヒト」の意味拡張とその動機付け

#### 4.1. 第一次拡張

##### ①基本義〈人間〉⇒②転義〈人類〉：メトニミー的拡張

基本義を仮定した際に、基本義のスキーマは、スロット（意義特徴）という内部構造をもち、いくつかのスロットを想定しようと述べた。[生物学上の種]というスロットを設けると、そこには[人類]という値を入れることができる。人間にはさまざまな側面があり、〈人類〉という側面は〈人間〉を特徴付けている様々な側面の一部を構成しているといえる<sup>6)</sup>。したがって、メトニミーによる意味拡張と考えられる。

##### ①基本義〈人間〉⇒③転義〈人材〉：メトニミー的拡張

基本義のスキーマには、[職能上の優劣]というスロットを設けることもできる。ここには[優秀]という値を入れることができる。人間には様々な側面があり、優劣という観点から見た場合、〈人材〉という側面は〈人間〉を特徴付けているさまざまな側面の一部を構成しているといえる。したがって、メトニミーによる意味拡張と考えられる。

##### ①基本義〈人間〉⇒④転義〈性格〉：メトニミー的拡張

この意味拡張の場合は、基本義のスキーマに、スロットを設けなくても説明できる。〈性格〉というのは、人間の気質に基づいた言動や行動に見られる傾向性のことである。つまり、ある人間

に付随する特徴や特性のことである。したがって、近接関係に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。

#### ①基本義〈人間〉⇒⑤転義〈他人〉：メトニミー的拡張

基本義のスキーマには，「[集団の中の単位]」というスロットを設けることもできる。ここには「[社会の構成員]」という値を入れることができる。これは個々の人間という側面である。同時に（社会の構成員である）自分を基準にして見た場合，自分以外の個々の人間は〈他人〉という側面をもつ。個々の人間でもあり〈他人〉でもあるという側面は〈人間〉を特徴付けているさまざまな側面の一部を構成しているといえる。したがって，メトニミーによる意味拡張と考えられる。

### 4.2. 第二次拡張

#### ⑤転義〈他人〉⇒⑥転義〈特定の個人〉：シネクドキ的拡張

基本的に自分以外の人間は〈他人〉であるが，全く関係のない「赤の他人」もいれば，程度の差はあっても自分と何らかの関係がある他人もいる。つまり，他人というカテゴリーの中でも，自分にとっての関係性がある点で「特殊な」他人である。したがって，シネクドキによる意味拡張と考えられる。

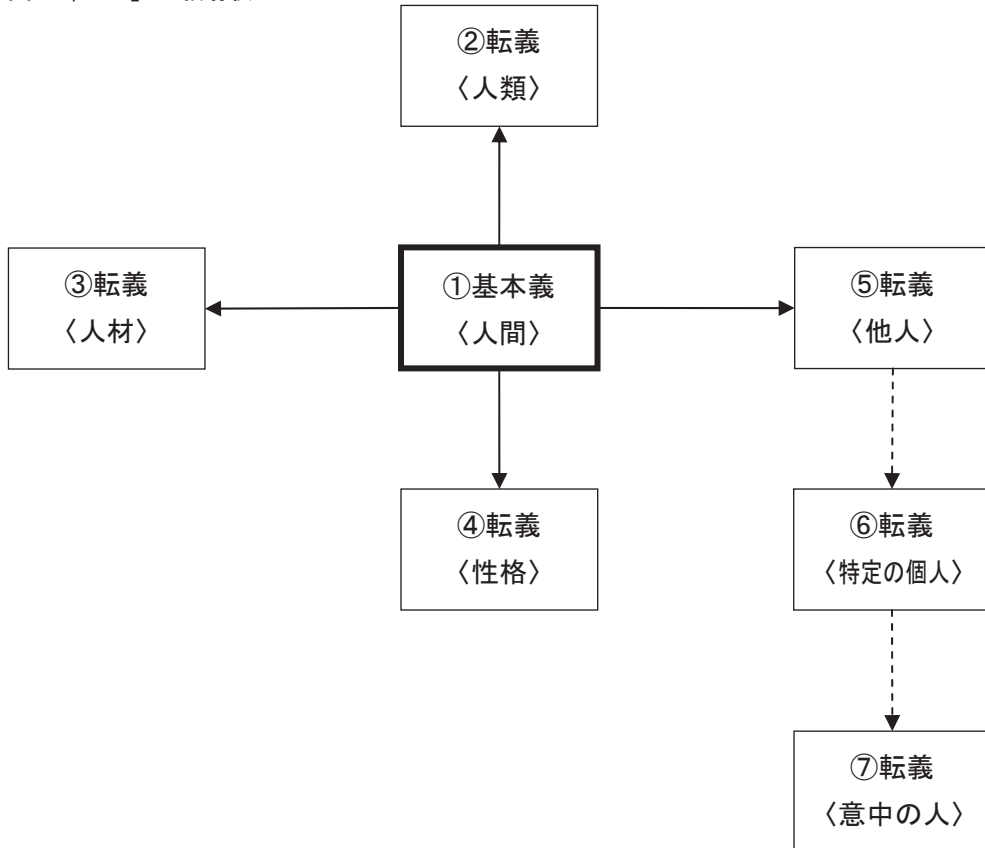
#### ⑥転義〈特定の個人〉⇒⑦転義〈意中の人〉：シネクドキ的拡張

他人であっても，自分と何らかの関係がある場合は，自分にとって特定の個人となる。しかし，その関係性の内容はさまざまである。この場合，自分が，特に異性と恋愛関係あるいは婚姻関係などの関係性を有しているということである。つまり，他人というカテゴリーの中でも，特に恋愛関係あるいは婚姻関係などがある点でさらに「特殊な」他人である。したがって，シネクドキによる意味拡張と考えられる。

### 4.3. 「ヒト」の意味のネットワーク

ここまで見てきた「ヒト」の意味拡張のプロセスを放射状カテゴリー（意味のネットワーク）の形に図示すると次のようになる。なお，図で実線矢印はメトニミーを，破線矢印はシネクドキを表している：

図3 「ヒト」の放射状カテゴリー



## 5. おわりに

本論では、日本語「ヒト」について、認知意味論の観点から、その多義構造と意味拡張のプロセスと動機付けの分析を行った。その結果、明らかになったのは次の点である：

- ①「ヒト」は多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。
- ②「ヒト」の基本義として、一般的な存在という意味で〈人間〉を仮定するのが妥当である。
- ③「ヒト」の意味拡張を引き起こす動機付けとして認定されるのは、メトニミーとシネクドキだけで、メタファーは認定されない。

今回、「ヒト」の複数の意味を認定するに当たり、国語辞典の記述を参考にしたが、分析の対象から除外したものもあった。すべての多義語に共通するが、いくつの意味を認定し、どの程度の精度で区別するのが妥当かということが常に問題となる。また、「ヒト」の〈自分〉という意味を

放射状カテゴリーに含めなかったが，このケースのように，3種類の比喻（メタファー・メトニミー・シネクドキ）によらない，意味拡張についても考察を広げることが今後の課題である。

## 注

- 1) 以下の6つの意味は，あまり一般的でないか，廃れた意味と思われるので除外した：①「あなた，（代名詞的に）お前」，②「成人，おとな，成人に達した者」，③「臣下，家来，従者」，④「ひとけ，人のけはい」，⑤「動作・状態・資格などを表す語のあとに付いて，それらの主体であることを表す。者。方（かた）」，⑥「〔法律用語〕法的人格（法人）。権利能力者。権利義務の主体たる人格。権利義務の主体たる法律上の地位。権利・義務の帰属主体である地位または資格。出生から死亡に至るまでの自然人」
- 2) 「ヒトの気も知らないで」「ヒトを馬鹿にするな」「ヒトをなんだと思ってるんだ」のような文では，話し手が，聞き手に対して自分を他者に見立てて，話し手自身を指している。つまり，「ヒト」は〈自分〉という意味で用いられている。ここでは，「他人」⇔「自分」の視点変更が生じている，すなわち，話し手は聞き手の視点を經由して自分を見ている（初山 2014：24）。したがって，このケースは3大動機付け（メタファー・メトニミー・シネクドキ）とは，別の次元で意味変化が生じているので，〈自分〉の意味は除外することにする。
- 3) 本論では，意味の記述に2つのレベルを設ける。一つは，「語義」で〈…〉で囲んで表す。もう一つは，「概念」で「…」で囲んで表す。「語義」と「概念」は，それぞれ語の意味の一側面を構成する。「語義」は，語の意味をなるべく簡潔に，ワンフレーズで収まるようにまとめた記述である。「概念」は，語の意味をなるべく，具体的に，詳細に，百科事典的意味をも交えて，まとめた記述である。
- 4) スキーマとは，抽象化された知識構造のことで，母語話者がある対象について持っている概念的な知識をモデル化したもの（＝パターンあるいは鋳型）である（菅井 2003：131）。
- 5) 査読者から「大切なヒト」という表現全体で〈意中の人〉を意味していると考えれば，結局，「ヒト」自体は〈特定の個人〉を意味しているのに過ぎないのではないかというご指摘があった。しかし，「私はそれほど若くないご婦人がご主人のことを人に言う時に『うちのヒトがね…』という言い方が好きです。『うちの旦那が…』というよりちょっと粹な感じもするし品も良い気がします。皆さんはいかがですか？逆に，嫌い，変という感覚の方いますか」（[http://www.toku-chi.com/pages/bbs/topic\\_detail.htm?id=4606572](http://www.toku-chi.com/pages/bbs/topic_detail.htm?id=4606572)）のような文脈では，「ヒト」は〈特定の個人〉を意味すると同時に，さらに意味が限定されて〈夫〉という語義で用いられている。「大切なヒト」も同様に〈特定の個人〉を意味すると同時に，さらに意味が限定されて〈意中の人〉という語義で用いられている。いずれにせよ，〈意中の人〉も〈夫〉も基本的に〈特定の個人〉であることに加えて〈異性〉であることも含意しており，その点で，〈特定の個人〉よりも意味が限定されていると考えられる。したがって，本論では，〈特定の個人〉と〈意中の人〉とは別個の語義として区別したいと思う。
- 6) 國廣（1994，1995，2010）では，「多面的多義」という言い方をしている。

## 参考文献

- Dirven, René and Marjolijn Verspoor (1998) *Cognitive exploration of language and linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- 國廣哲彌（1994）「認知的多義論—現象素の提唱」『言語研究』88：1-19.
- 國廣哲彌（1995）「語彙論と辞書学」『月刊言語』24（6）：38-45.
- 國廣哲彌（2010）「語の意味をめぐる」澤田治美（編）『語・文と文法カテゴリーの意味』（ひつじ意味論講座 第

- 1 巻) 1-22. 東京：ひつじ書房.
- Labov, William (1973) The boundaries of words and their meanings. In: Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy (eds.) *New ways of analyzing variation in English*, 340-373. Washington: Georgetown University Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京：研究社.
- 初山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』東京：研究社.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 73-134. 東京：大修館書店.
- 中村明 (2010) 『日本語語感の辞典』東京：岩波書店.
- Rosch, Eleanor (1975) Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1997) 「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』(日英語比較選書①) 94-177. 東京：研究社.
- 瀬戸賢一 (編) (2007a) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 瀬戸賢一 (2007b) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』31-61. 東京：ひつじ書房.
- 菅井三実 (2003) 「概念形成と比喩的思考」辻幸夫 (編) 『認知言語学への招待』(シリーズ認知言語学入門第1巻) 127-182. 東京：大修館書店.
- Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋英光 (2010) 『言葉のしくみ—認知言語学のはなし』札幌：北海道大学出版会.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*. Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社.
- Wittgenstein, Ludwig (1978) *Philosophical investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

## 参照国語辞典

- 『大辞林』(三省堂, 第3版)
- 『大辞泉』(小学館, 第2版)
- 『広辞苑』(岩波書店, 第5版)
- 『新選国語辞典』(小学館, 第16版)

## 例文検索ウェブサイト

<https://www.google.com/>